

1. 「国語科の学習形式を活用した作文授業の実践—意見文の場合—」

前川孝子(早稲田大学日本語教育研究センター)

日本語初級後半のコースでの作文(意見文)では、作文授業の所要日数や流れについての大枠は決められているが、その細かな学習方法については教師に委ねられている。現在、中学校国語では学習指導要領に基づき中学2年で基礎的な意見文を学習する。国語科採択教科書(5社)を利用し、意見文の学習内容やそこで行われる学生同士の相互評価などを取り入れることで学習内容を明確化できると考え、授業を試みた成果を分析・考察する。

2. 「就職活動を控えた留学生を対象にしたシャドーイングの活用」

津田訓江・山本恵美子・栗田恵美子(公益社団法人国際日本語普及協会)

口頭表現力向上トレーニングの一環としてシャドーイングの手法を取り入れる現場が増えてきている。発表者の関わる現場では、就職活動を控えた大学3年留学生に焦点を当て、彼らが就活生、新入社員として遭遇するであろう場面の会話を中心としたシャドーイング教材を開発した。2010年度導入以来、活用方法に工夫を加えながら効果を上げてきている。発表では、教材の内容、具体的な指導例、学生の反応等の結果を報告する。

3. 「上級文章表現クラスの授業実践—適切な「論点」と「問い」への導き方を探る—」

山口恵子(桜美林大学)・鈴木秀明(目白大学)

レポートや研究計画書など自身の考えを表明する文章では、パラグラフ・ライティング、問いの立て方、論点の見つけ方など各種AJの能力が求められる。しかし、上級学習者でもこれらの習得は容易ではなく、教員も指導に苦慮している。本発表では上級文章表現クラスの授業実践を報告し、多くの学習者に見られた「問いの立て方」と「論点の見つけ方」の問題点とその対応、および「整合性のある文章構成」についても述べ、指導法を探る。

4. 「日本で学んだ工学系研究者の帰国後の日本語使用」

アブドゥハン恭子(九州工業大学)

日本の工学系博士課程を修了し海外の研究・教育機関で働く12名の元留学生に対して行った調査の結果を報告し、日本留学におけるアカデミック・ジャパニーズの必要性について考察する。2012年8月のアンケート調査、2013年にかけて行ったインタビュー調査に合わせて、今回フォローアップのアンケート調査を行い、主に帰国後の日本語使用とその意識を分析する。

5. 「ティーチングアシスタントとステューデントアシスタントを活用した初年次教育の試み」

高橋薫(東洋大学)

本発表ではティーチングアシスタント(TA)とステューデントアシスタント(SA)を活用した初年次教育の試みについて報告する。本実践では文献のジグソーリーディング、文献検索、アイディアの想起、アウトライン作成、レポート執筆、ポスター発表までのレポートライティングのプロセスを、教員、TA、SAの3名でチームを組んで指導にあたった。授業アンケートによると、TAやSAが学生のロールモデルとして肯定的に受け止められており、学習の動機付けとなっていることがわかった。

6. 「中級日本語学習者の価値観・論理的思考の変容 — 「対話レポート」を通して — 」

松本陽子（早稲田大学）・佐藤正則（早稲田大学）・手島利恵（早稲田大学）

本研究は、早稲田大学日本語教育研究センターの総合日本語中級クラスの学習者を対象に、課題達成までの活動を学習者がどのように捉えているのかを調べたものである。学習者は自ら決めたテーマに沿って他者と対話し、論理的構成を意識したレポート作成活動を行った。課題達成までのプロセスについては、レポート、アンケート、内省シート等を基に分析した。本発表では、アカデミックライティングにおける対話の意味を考察し、今後の実践に向けた教育的示唆と課題を述べる。

以上